

広島俳句倶楽部

令和七年五月作品集

三段峽 すみれ

父との旅の思い出は、一つ一つしかない。その中で印象に残っているのが三段峽だ。確か姉と弟と私と父だったと思う。実家からどうやって行ったのかも覚えていないが、三段峽の道が怖かったので、父を頼りに一生懸命歩いて歩いた記憶がある。父は大きなリュックを背負い、手には植物園鑑らしきものを持っていた。三段峽には珍しい植物があり、それを調べる事が父の目的だったようだが、私は父と出掛ける事が嬉しくて忘れられない旅だった。

岩場より伸びたる躑躅くぐり抜け

下る人と一声交はし岩景風

榎の木の根は岩を巻き茂りけり

父の手を握り飛び乗る灼くる岩

片蔭に早き流れの川を見る

笹の葉を折つて汲みたる清水かな

川蜻蛉岩の窪みの水に降り

緑蔭で図鑑見る父手には苔

清流に麦茶を浸しむすび食ぶ

夏木立だらだら下る足重し

《作品鑑賞》

ちどり

私も父との旅の思い出が少ないので、今回のすみれさんの作品を興味深く読ませてもらいました。ありがとうございます。

また、何十年も前の体験を克明に俳句にされているのに、感心しました。

榎の木の根は岩を巻き茂りけり

父の手を握り飛び乗る灼くる岩

榎の木の根が岩を巻いて茂る程だから、子どものすみれさんには、三段峽の道はとて怖かったですね。その途中、お父さんの手を握って灼けた岩になんとか飛び乗った時は、ほんとしました。

片蔭に早き流れの川を見る

笹の葉を折つて汲みたる清水かな

清流に麦茶を浸しむすび食ぶ

さらに進んで行くと、片蔭に早い流れの川があったり、笹の葉で水を汲んだりしてとても心地よさそうです。そして、清流で冷やした麦茶を飲み、おむすびを食べた後は、大満足ですね。

蝶々の近く来てゐる心礎かな

花残りここもまた弥生墳丘墓

椿落つればその上は社なり

巨石へと春潮は音くり返し

豆の花長き峠の終りけり

景桜のあたりまで海来てゐしと

刻々と立夏の朝となりゆけり

ぼうたんに移ろひ易き日が懸かる

袋掛ければ久々の雨となり

樟若景濠へと川を引き込んで

佐保光俊

ほらそこと君の指さす初桜

この土手を君とゆきたし花万朶

散る桜やうやく家に戻りけり

目の前の雀隠れに雀降り

春惜しむ雁木に二人腰下ろし

景桜に一夜の雨の上がりたる

川風の少し強くて紫蘭かな

花海桐海の香りの風吹いて

大樟に鳴き始めてか鴉の子

細やかに新樹揺るるを見て飽かず

高尾ひとみ

鶯の夕餉どき来て鳴きにけり

裏山を少し染めたる春夕焼

あちこちの友より届く莢豌豆

路味噌のむすび頬張る昼餉かな

四十雀の声に目覚むる朝かな

歩行者の上る坂道風薫る

屋敷神かこみて咲けるあやめかな

山鳩の散らしてゆける竹落景

身ほとりに縋れつつ飛ぶ夏の蝶

青鷺が谷川を翔つ音立てて

あざみ

菜の花や舟に次々鳥の来て

春川に向いてゆつくりむすび食ふ

うららかや在来線であへゆく

花水木の影にしばらく立ち見上ぐ

ボールつく少年ひとり夏近し

永き日のインコ水浴びくり返す

ガラス越しに売り猫を見る遅日かな

憲法記念日頬杖をつく古机

新築の公民館や五月来ぬ

青鳶の家の明りを今日も見る

亜矢

芸備線行く遠翹の風のなか

ルノワールの婦人のごときピクニック

友の家藤のまはらとなりにつけり

あねいもと藤に寄つては蜂に逃げ

モルヒネに微睡む君よ余花の雨

そこそこの母でありしが母の日来

ロープウェイ地中海から夏空へ

モナリザの微笑みの前汗しづか

雌蝦蛸を筑いっぱいに茹で上ぐる

大胆に鉄を使ひ蝦蛸を剥く

綾乃

満開の花に止まれる雀かな

瀬野川の河口に来たる初燕

行きつけの飯屋の軒に燕来る

春霖の改札口に子を待ちぬ

春の雨居酒屋で子と語りたる

別れ際子の手を握る四月かな

夕されば音戸の瀬戸のつゞく濃く

客船の窓に日の差し春園くる

クルーズ船出帆間近春の夕

山下りて身に受けてゐる若景風

井藤希

松雪草零れ種から芽吹きたり

残雪をいただく富士を仰ぎけり

百千鳥聞いて朝餉の支度せり

早朝の障子の向う春の鳥

父母の墓前に鳴いて句鳥

牡丹に話の弾む夫と吾

指差して車窓から見る桐の花

薔薇咲いて庭いづばいに赤白黄

えごの花朝の道に見上げけり

ひとときを車窓に眺め五月富士

大畑恵

行くほどに鳥声高し若景山

菩提寺の泰山木のはや咲いて

裏木戸を越して吹かるる雪柳

三叉路の一つは畑に花薊

蝶に道ありしか又もその木越ゆ

間伐の谷を抜けての青時雨

どの橋を行くも景桜川の街

広島に鐘の音響く夏始め

乙女らの肩の白さや夏めける

夕薄暑歩数のノルマ越えにけり

暁子

青き踏みくすぐつたさの大地なり

初蝶の屋根より上を舞うてをり

囁に目覚めテラスで鳥探す

クローバーの花冠を母の髪の上に

つばくらめ水田掠めてまた来たる

リラの香に癒されたくて庭に降る

山の家裏も表も山躑躅

県北はまだまだ残花見られたり

山荘の隣人蕨届けくれ

畑の上ゴルフボールや桐の花

すみれ

ベンチにて休む旅人花は景に
木の椅子に寄り来る雀夏隣
新しき居場所にも慣れ四月尽
景桜の影あるごとに休みたり
目の前の芍薬剪つてくれし人
風音に見上げれば降り竹落景
黙の人手入れしてをり菖蒲園
風吹いて白藤揃ひ揺れるたり
髪切りしことから会話夏椿
めまとひを抜けて海への道続く

知佳子

母が家を横に見ながら春田打
訪ね来て母と桜を見てをりぬ
幼子の帽子で受くる花吹雪
母が家の前の棚田で蛙鳴く
天辺から白藤下がる大櫓
故郷の椿を母の部屋に活か
朝起きて窓を開ければ百千鳥
溝浚ひ終へて笹舟流しをり
さくらんば挽ぎ幼子に手渡す
万緑や峠を越えて町へ出る

ちどり

流木の砂払ひたる雁供養
頭から嚙んで目刺の潮の味
たんばの絮吹きし日を思ひけり
燕来る川の流れを遡り
御衣黄の散り際の色確かめん
真四角に剪定されて躑躅咲く
石楠花の咲くや団ざさぬ寺の門
石楠花の陰に眠れる猫の息
木苺の一粒甘き朝かな
前髪の煽られてゐる青景風

辻純江

鴉鳴く方から吹いて木の芽風

春の海見ゆる光へと歩きたる

囀は見上ぐる大樹から聞こえ

帰り来て大き桜に迎へらる

嘗てここ紫雲英生えしと思ひけり

友と会ひ躑躅の庭に長居せり

新調の夏帽子にて出掛けけり

大輪の薔薇へと足を運びけり

薔薇の家過ぐれば風の向き変はる

帰省子を待ちつつ朝の庭を掃く

雲雀

氷菓子市場の雑多の上に置く

完売を見物しつつ氷菓子

食べ方と並び方がある夜店

麦酒きてもろもろ寄せるカウンター

民謡のさーゆいゆいと掛け麦酒

立ち入りの不可なる拝所蝶は飛ぶ

引き潮の浜に数体ある水着

片言のニイサンが呼ぶ海の家

昼寝人ではない方はいそがしき

昼寝起意外と食べているラーメン

ふじ女

土手青む立ち止まったり歩いたり

里の祖母春田の中で手を振れり

つくしんぼ子心知るは難しき

花の塵露店はすでに閉ぢられて

庭に出て薔薇の赤き芽確かむる

名はめかり若景風連れやつてきた

薄暑かな川はゆつたり流れたる

人混みの途切れ一人の薄暑光

海光と薄暑の光ひとり浴ぶ

窓辺から見下してゐる山法師

松田裕子

明星の朧のままに空へ消ゆ

蝶生るいつも挨拶くれる家

検診に山藤揺るる峠越え

夜中ぢゆう蛙鳴きをり雨の庭

大楠に昇る朝日や夏立ちぬ

傍跨ぐ橋より見たる卯月波

柵の間を伸びて芍薬咲きにけり

筍を塩茹にする匂かな

反橋に立ちて眺むる杜若

樗咲く公園に来る親子かな

村上正人

父祖の地をまた振り返り山桜

強き風弱き風吹く藤の房

いくたびも羽ばたき真似て巣立鳥

昼からは雨上がるらし緑立つ

収まらぬ助詞の一文字楠若葉

父の日や置いて逝きたる広辞苑

夏燕花見小路を低く飛び

面会を終へし昼餉に青菜風

頂に日の降る友も夏帽子

レジ横の樽から抜いてラムネ瓶

森口良樹

すかんばを一茎折りぬ山の村

春の夢覚めて干し物取り込みぬ

代掻の済みたる畔に竿を持ち

花水木散る庭眺め語らひぬ

門柱に蟻の行き交ふ立ち話

しまなみの夜釣の側の宴かな

早苗田や伯耆大山すぐそこに

ぎしぎしの花をむしりて懐かしみ

吹き上ぐる風に青菜の翻り

吹き上ぐる風に青菜の翻り

秋楡

友の目に戻る暮仇新茶汲む

団店の知らせ出す夜の新茶かな

豊かなるオブリエの乳房風青し

薰風や抱つこをせがむ声のなほ

風青し備中にある心柱

石棺に触れば涼し吉備国

鎮もれる一の荒手や花櫓

ジヨギングの振り向きもせず花櫓

十薬や音遙かなり津山線

今井淳子

家居して鶯の声聞いてをり

一瞬で蝶捕まへし男の子

神社へと山下りをり春の風

妹と草餅一味はひぬ

母のこと姉妹で語る彼岸かな

二人とも耳遠くなる彼岸かな

春の海妹と見て昼を食ふ

ガラス戸に小さき蜘蛛の這うてをり

部屋中に百合の香れる朝かな

土肥律子

春雷に目覚めし朝の景のしづく

みつけた薫咲きたり朝の庭

雲雀鳴く飛行機雲は徐々に消え

入学の写真の母の着物着る

雪柳名を知ったのは祖母の庭

春の蚊や読書の手と目そのままに

春の夜や指鉄砲を壁に向け

田に出でて何つくらうか蓮華草

春シヨール掛けてひとり旅に出る

今

届きたる若布茹で上げ軒に干す

一株が鈴全体に菖蒲の芽

たんぽぽの絮を吹きつづバスを待つ

祠への坂の道端白堊

木の芽和酒好きの友現はるる

百千鳥園児とくぐる鳥居かな

子に混じり羊の毛刈り見てゐたり

川土手に人声のして芝桜

さる山の猿寝転んで薄暑めく

山野ウタ

座敷より卯の花高く見えてをり

卯の花の咲きこぼれたる山の寺

卯の花や食のすすみし母と居て

薔薇園の真中に佇ちて走り梅雨

青梅雨のくつ脱ぎ石の濡れてをり

青景風吹奏樂の音近く

桑門わかこ

側道に白詰草の広がりぬ

景桜に強き風吹く朝の道

曇天を明るくしたる新樹かな

深呼吸して見上げたる樟若景

後退りして泰山木の花仰ぐ

川端のカフェでおしやべり街薄暑

撫子

景桜や長き階段濡れそぼち

夏めくや伸ばせる髪を結へばなほ

裏庭にすみれの花を見つけたり

景桜や眼下に光る由比ヶ浜

燕の子巢立ち間際に雨の降る

坂道に自転車押せば初夏の風

土起こしくねる蚯蚓の赤さかな

夏の雨高速バスの窓曇る

朝早く紫陽花一枝取りにけり

薔薇咲くや昭和を生きた人の本

雨の日に梔子の花香りたり

百日草まこと百日咲きにけり

飛行機雲長く残るや聖五月

枇杷の実を雀と鴉狙ひをり

ひまはりの我が背丈より伸びてをり

大原良子

上島康子

河原静子

畠境を越えれば若景広がりて

茄子苗に朝の日課の水遣りす

芍薬の蟻を払ひて燻に挿す

芍薬の花の終りに肥料する

梅雨前の水路の掃除念入りに

紀英子

藤棚や隣の席の出雲弁

祖父作の四代使ふ櫛笄

手作りの灰汁巻き二本友の荷に

初夏の風向計のよく動く

新緑を歩き交ふ人の五六人

高梨英子

たんぽぽの絮ふはふはと露天風呂

どくだみの花の白さが好きになり

螢飛ぶせせらぎの道歩くなり

今年またいつもの道の藝の声

やす保

明け方の雨に重たき若楓

日を受けてサッカーする子様の花

張り付いて二日目の蛾とともに居て

熊谷ゆり子

庭に石洗ひ並べて春の風

坂道を電動自転車風光る

深呼吸朝の躑躅の前に立ち

桜湯

景桜や足湯にひたる一家族

実桜や碑に刻まれし恋の歌

幼児の絵壁に眺むる五月かな

高嶋絹代

ばらの街世界薔薇展始まりぬ

鐘馗様粽持つ子の横に居て

雷鳴が遠くにあつて夕焼空

民

溜池の水面に波紋花は葉に

雨粒の二つ付きたる薔薇を剪る

梅干すや祖母のありしを思ひつ

みさ子

満天星の花ぼろぼろと日の暮るる

石楠花や母と通ひし寺に咲き

道過る毛虫見てゐて日の暮るる

美耶

小満や夫とシヤレオで待ち令はせ

歩道脇今年も咲けり未央柳

居令はする人とも会話生ビール

山崎桂子

潮引いて上りし若布食卓へ

頂きし筍を置く流し台

古川廣子

令和七年四月度作品集より

暁子 私の選んだ十句

上ミ下モの橋の霞める古道かな
山深き宮に来てをり百千鳥
よく動く鳩の首元風光る
蒼天と鳥声だけの春野かな
タムシバは咲いてゐる木とまだの木と
山里へ峠下れば梅白し
夫と居て蝶の行き先追うてをり
ゆるやかに車椅子押す梅日和
花の雨毘沙門さんに灯のともる
ものの芽の土押し上げて赤きかな

佐保光俊
あざみ
亜矢
井藤希
すみれ
ちどり
雲雀
森口良樹
高嶋絹代
撫子

辻純江 私の選んだ十句

田の雪を踏んでより釣る岩魚かな
こんぐれえ雪と言はんと運転士
よく動く鳩の首元風光る
手に入れし根付きの芹を洗ひをり
白木蓮郷の山路に咲く頃か
春落葉途切れてはまた古道行く
ひとたびは空に上りて散る桜
山里へ峠下れば梅白し
夫と居て蝶の行き先追うてをり
山椒の芽ちらし寿司でも作らうか

佐保光俊
高尾ひとみ
亜矢
井藤希
大畑恵
暁子
知佳子
ちどり
雲雀
松田裕子